

## 崔書勉先生と私『なぜ濃厚な人間関係を築けるのか』

静岡県立大学教授 小針 進

〈文教部長官（文部大臣）が韓国から来て、「おい、おまえ、福田赳夫先生を紹介しろ」と。仕方がないから福田先生へ、「文部大臣が来て、ぜひ先生に挨拶したいと言っている」と言ったら、「その日の七時に、赤坂の大野という飲み屋に來い」とおっしゃる。ところが、その日のNHKニュースで福田さんが「京都で講演を終わった後、車に乗るときに倒れて入院した」と報じた。文教部長官は「もう今日は來ないだろうな」と言うから、「福田さんは非常にマメな性格なんだ。來れなければ連絡がある。私は行く」と返答した。二人で七時に大野へ行ったら、福田さんがもう來ている。狐につつまれた。福田さんは「いやあ、文部長官はお元気ですか」という調子で、私が「先生、怪我したんじゃないんですか」と問うと、「いや、自動車に乗るときに滑って・・・ゆつくり休めてちようどいいやと思つて（しばらく入院した）。きょうは約束だからちよつと早めに來たよ」と〉

これは七〇年代の東京生活でのエピソードをめぐる崔書勉先生の語りだ。はっきりした日時はわからないが、福田赳夫氏が田中内閣で蔵相をされていた時と思われる。何があつても約束を守る福田赳夫氏の律儀さがわかる。日韓関係を重視する視点もあつたのであろう。さらには、崔書勉先生との友情もあつたはずだ。

このエピソードからは、崔書勉先生の存在感もわかる。大物政治家と簡単にアポイントメントをとることができ、その人物が怪我を負つた日でも約束の場所に來させてしまう。それは福田赳夫氏の寛容さだけでなく、崔書勉先生の人間的な魅力ゆえなのか。当時、福田赳夫氏（一九〇五年生まれ）は六〇代後半、崔書勉先生（一九二八年生まれ）は四〇代中盤であつたはずだ。「友情」といっても、年齢差は二十以上である。

ところで、ここで「一九二八年」とさらっと書いたが、「一九二六年生まれ」と書かれたものなど、崔書勉先生の生まれには諸説(?)がある。ご自身が次のように語る。

〈韓国国家機密に属することですが(笑)、私の歳を知ってる人はほとんどいません。じつは一九二六年生まれではなくて、二八年生まれです。なのに、二十六年生まれになったり、あるいは一九一九年生まれになったりして、たとえば朝日新聞が、「新聞に出すことに歳が違っているの、本当の歳は幾つなのか」と、正式に聞きに来たことがあります〉

なぜ、そうなったかと言えば、その一つの理由を「ご自身は次のように述べている。

〈岸(信介)先生はじめ日本の政治家は、韓国のいわゆる朴政権における若い世代のクーデターグループの歳を見て、「若いのはいいな、いいな」と褒めているので、「なんで褒めていますか」と言ったら、「自分たちはもう年で、あの若さはお金では買えないんだ。若いのはいいな」と言いながらも、尊敬の念がそこに入っていないのを僕は見抜いて、「ところで、崔さんは幾つなんですか」と聞かれたときに、正直に答えなくなかった〉

したがって、崔書勉先生が日本にやって来た一九五七年の時点で、年齢は二十八歳か二十九歳ということになる。まだ三〇歳にはなっておられなかったわけだ。当時、

〈日本に着いて、I didn't have a friend, even one acquaintance——と言いました。皆さんは不思議に思うだろうが、当時一人の友だちも知人もいなかった〉  
と証言される。

福田赳夫氏とのエピソードからわかるように、それからあつと言う間に濃密な人間関係を日本で築いたわけである。一九七七年七月二一日には滞日三〇年を祝う会が東京で開かれているが、発起人には大物思想家、閣僚経験者、財界人、大学学長、国会議員、ジャーナリスト、弁護士など、当時の有力者やオピニオンリーダーばかりである。しかも、その濃厚な人間関係は、韓国へ戻って三〇年を経て、日本上陸から数えて六〇年となった今でも続いている。

なぜ、このようなことが可能なのか。「時代」がそうさせた側面もあるだろう。しかし、「崔書勉」という人間そのものに、何か隠されているように思えてならない。

そんな思いから、崔書勉先生が生まれてからの歩みや日韓関係にかかわる体験を聞き書きする研究を、私は他の研究者仲間と二〇一一年四月から取り組んでいる。こうした作業をオーラルヒストリーというが、ここで〈カツコ〉で示した引用のすべでは、その聞き書きの一部である。

聞き取りはほぼ終えて、それを記録化して推敲する段階に入っている。報告書形式で刊行できる日も近くなってきた。この作業をしながら、「崔書勉」という人間そのものへの魅力を感じる語りが多いことに気付く。たとえば、

〈李承晩政権に追われたにもかかわらず、公開の講演で李承晩を誇らなかった〉そうである。それは〈君子はその国を貶めず〉を肝に銘じてきたからだ〉

という。聞き手が、その言葉の意味をわからないという顔をする、

〈君子は、不幸にも自分の国を追われたけれども、逃げた国に行って自分の国を誇らない。これは君子の徳である〉というのが、小さいときからの習わしというか、聞き覚えだったわけですから、と教えてくれる。さらに、

〈日本でも、大山郁夫という人が日本からアメリカに亡命したけれども、彼はアメリカに十年いる間、日本の悪口を言わなかった。主義主張の悪口は言っても、人は誇らなかつたので有名だ〉と続ける。

自国・他国を問わず国やその国の人をむやみに非難しないという主張そのものに共感できるし、「君子はその国を貶めず」と

という言葉がすぐに口から出て、例として大山郁夫という人物名がパッと浮かぶ反応にも驚く。こうしたスタイルでの語りが多い。

主義主張を離れて、「ただ者ではない」というオーラを感じる連続が、崔書勉先生へのオーラルヒストリーなのである。

